

栽培漁業推進対策事業（スジアラ）

狩俣洋文・多和田真周・仲盛 淳・仲本光男・道清勇介*

1. 目的

本県において、魚価が高く水産有用魚種であるスジアラの放流技術の開発に努め、八重山周辺海域での栽培漁業を推進することを目的とする。なお、本事業ではスジアラの間中育成と放流を実施した。

2. 材料及び方法

平成14年度6月6日に日本栽培漁業協会八重山事業場から、スジアラ種苗7,666尾（日令44日、TL 24.3 mm）を受け入れた。陸上水槽（円形40 tコンクリート水槽φ4.5×2.2 m, 60 tコンクリート水槽4×8×2.2 m）内に、小割網生け簀（3×3×2 m, 目合い3～5 mm）を張り、10月31日まで中間育成を行った。

餌料は種苗の大きさに準じて、配合飼料7種類と冷凍コペポダを給餌した。給餌量は約200～1500 g/日であった。給餌方法は飼育初期には手撒きで行い、餌付き始めてから自動給餌器も併用した。水槽および網替えは7～10日間隔で行い、種苗がTL 80 mm程度からは1カ月間隔で行った。

3. 結果及び考察

8月21日まで3,053尾（TL 79.5 mm）を中間育成し、右腹鰭抜去による標識作業を行った。腹鰭抜去後2カ月間の馴致期間に、TL 112.3 mm, BW

22.2 gまで成長した。馴致期間の生存率は98.1%で腹鰭再生率は8.6%であった。

中間育成した種苗2,996尾は、10月31日に竹富島西側海域に放流した。放流海域は水深約3 m, 潮通しが良く、砂礫底で1 m大の岩が点在した。

再捕については平成15年3月31日現在認められていない。

4. 今後の課題

中間育成の初期において、個体間の大小差が顕著に見られ、小型個体の摂餌不良および共食いによる斃死が続いた。30日程度の間中育成でTL 35 mm程度に成長した後は、摂餌不良による斃死がほとんど見られなくなった。中間育成初期における餌料の大きさや飼育方法（選別等）の改善が必要であろう。

放流種苗の多くは、被食されていることが示唆されており、¹⁾放流種苗の回避能力向上を目的とした馴致法の確立が必要である。また、放流場所の選定や放流方法、適正放流サイズ等について今後検討する必要がある。

文献

- 1) 浜崎活幸. 新しい栽培種として期待される魚類
(1) スジアラ. 日本栽培漁業協会事業年報, 2000 ;
337 - 338 .

* 非常勤職員